

春燈

2016
January

1 月号



主宰の句

安立公彦

秋冷の句座や帰らぬひとを待つ

(悼・小淵二美江さん)

大仏の慈顔をつつむ秋日かな

(鎌倉四句)

朝寒の江ノ島とほく濤に座す

極楽寺坂枯ゆくものに日遍し

虚子眠る谷やとも山茶花日和なる



成瀬櫻桃子の句

十六夜や海の底より平家琵琶

『春燈』昭和五十九年

櫻桃子先生の代表作である。先生の喜寿のお祝に弟子の有志が下関の赤間碑宮に句碑を建立。平成十四年九月二十三日、記念式典が行われました。除幕式では、平家琵琶奉奏のなか句碑に御神酒が注がれました。

二位の局に抱かれ入水した幼帝を悼む琵琶の音が海の底から湧き起ってくる。その悲しみの音が十六夜の月光に吸い上げられてゆくように雅趣をたたえた作品である。

加藤 良子

成瀬櫻桃子の句

地震予知したる泥鰯や鍋さわぐ

「俳句」平成十三年

鯨の地震予知については、以前から地電流の変化など地震の前兆現象を敏感に掴んでいるとか、鯨の異常反応と地震との相関は八 ∞ あるなどといわれてきた。一方泥鰯の地震予知となると、鍋に入れられた泥鰯本人にとつては死と隣合せているわけで、予知どころの騒ぎではない。そんな理屈を超越した世界を、師は巧みに見せて下さっており、俳句の面白さを堪能させられた。

生方義紹

燈下集



○ 小泉貴弘

一睡の夢より覚めて昼の虫
腕組んで立見の父や盆踊
滑走を楽しんでゐる芋の露
蓮の実の跳んで未来へつなぎけり
秋の灯や崩れさうなる古書の嵩

○ 戸辺信重

朝寒や遠山思ひ身したくす
刈たての匂をふくむ刈田風
雨戸越し気配たしかに小鳥来る
花八手赤子の拳ほどに出づ
本閉ぢて雨かぜを聴く秋の夜半

○ 中野さき江

秋うらら繩文の世に遊びけり
土産ばなし縁側で聞く柿日和
生家いま新蕎麦甘し風の国
もらひ湯の足もと軽き虫の闇
小布施堂栗の小径は風の径

○ 割田容子

(加賀利貞塚)

秋扇人のなごりの香りかな
名月に胸の門はづしけり
蛇穴に後ろめたさのなかるらん
大仏になごみの声や小鳥来る
一刀彫のほとけ煤けて菊日和

○ 栗原完爾

蓑虫の風に疲れてしまひけり

深々と一寺抱きて紅葉山

土牢に在す仏や式部の実

行く秋や堂を支ふる朱の柱

この年の別れいくつや初紅葉

○ 小菅礼子

蔵の戸の重くなり来し寒露かな

今日の月ひとりの贅にひたりけり

色なき風背まろき身を包みけり

幾年経し竹林なりや伐り初む

竹ゆるる景も見納め竹を伐る

○ 生田高子

歎かひの詩人生れし日冬に入る

おでん好き銀座の路地を知りつくし

時雨忌や縁者の住みし芭蕉庵 (伊藤松子)

草庵に日のたつぷりと鷓鴣

贈られし朱欒しばらく厨の隅

○ 本多遊方

そらにロケットわが眼前に蓮の実飛ぶ

種瓢たうとう焼きが回りしか

大櫂の一枝おろし後の月

墓石の話に花が文化の日

リモコンと座椅子孫の手冬隣

○ 武田巨子

蹲踞の底より月の現るるかな

船生簀底の底まで秋鯖よ

尾鰭たたみて太刀魚の量らるる

光みな海にとけゆく十三夜

落鮎の残りの命いただきぬ

○ 諸岡孝子

眠りにも裾濃ありけり降り月

老懶を戒しむる日々黄落す

木枯や海の何処から折返す

膝の子の温み貰ひて寒露の日

松手人間合ひよろしき夜の雨

○ 小泉三枝

やはらかき雨音とどく菊枕
見得切つて菊人形の盛り過ぐ
鬼女となるまでのくだりや竜田姫
眠ること増えにし母や昼の虫
転職を重ねし父や鷹渡る

○ 平野加代子

半襟の芯新しく冬に入る
七五三の母子に同じ糸くぼかな
俎板の海鼠かすかに吐息して
毛糸編むきちんと未来見つめねば
胸底を流るるごとく冬銀河

○ 田嶋洋子

柚子の実や路地の向かうの海明り
山のご糸海の光や寺紅葉
若き日の中也の瞳秋灯
嫁ぎ来し日よりの家紋菊真白

秋の星やさしき教へいまさらに (悼・中村喜美子様)

○ 菅澤陽子

菊の香や師の遺墨展敬嘆す
芳名簿に墨の涉むやつくつくし
ピーターラビットの小皿に月見団子かな
庭の木々手入のすみし良夜かな
タワーの灯マンシヨンの灯の夜長かな

○ 白神知恵子

棗噛み眠れば見ゆるもの多し
朝露に締まる奉仕作業の靴
色鳥を挿頭に吉備の仏たち
傷心を蒲の穂絮の辺に立たす
出不精の針山に刺す赤い羽根

○ 長谷川歌子

古き夢再び願ふ流れ星
反骨の声高々と賜の秋
保存樹の丈を競うて神送り
ジーパンの禰宜の箒や神の留守
社の犬家守り果たせし神迎へ

当月集

安立 公彦選



農神の筑波山麓豊の秋

秋郊の橋や袂に矢立の碑

洞窟の仏見守る曼珠沙華

晩学の墨絵や里の柿二つ

散録に句心繋ぐ秋の空

○ 赤岡 茂子

○ 肅藤 晴夫

天上大風風の形に雁の棹

心月輪良寛禅師の能書かな

残菊の寂光まとふ在り処

再会を果たせぬ名残り後の月

ガレの灯のひときは秋思濃かりけり

○ (故) 小淵二美江

芙蓉の実花の記憶をとどこむる

病室の窓よぎりゆく秋の雲

秋の雲けふは深紅に暮れにけり

病窓の網戸を剥がす夕野分

病窓の秋逝く空を見てひと日

○ 後藤 眞由美

雁渡し松が枝透ける日影かな (鎌倉五句)

鎌倉文士の風韻偲ぶ暮の秋

畑物と並べ売らるる小菊かな

フクちゃんのポスターを背に秋惜しむ

一族の墓塔に秘むる秋思かな

○ 吉村 さよ子

レクイエム聴きし帰りや鳥渡る

芋莖束ぶつきらぼうに渡さるる

灯下親し壁に凭るる部屋小さき

しづけさやもみづる庭の禅道場

瓢の笛吹いて唇うらがなし

春燈の句

安立 公彦選



神楽舞ふ巫女や真面目な幼顔

妻と暫し冬夕焼に見とれけり

年用意進まぬ日々の二度寝かな

熱帯に冬の季を詠み早十年

コスモスに風の戯れなまめきぬ

掛時計釣瓶落しといふ時刻

窓明り乗せて戴く新走

朝霧の奥の奥までお茶畑

手作りの獅子持ち子等の里祭

一心にパズル解く背や菊日和

毛糸編む齢を見せぬ針さばき

薄紅葉古式雅に蹴鞠の儀

谷戸の月潮騒遠く届けけり

秋澄める海一望や婚の鐘

バンコク 大口 堂遊

三重 上野 進

広島 川崎 雅子

東京 土屋 光男

断崖のホテルの窓や冬の浪
冬の海一筋水脈を残しをり

寺庭の箒目著き冬はじめ

冬晴やいくさ再びあるまじく

いつときの綿虫の舞妻の墓

亡き妻のジャケット羽織りて日もすがら

黄落や喜怒哀楽を地にちらす

冬支度死仕度せむか小六月

夜咄やひとり笑ひの女ぬて

神送る冥土で吐く科白預けたり

故郷より俵で届く今年米

窓に寄りいつしか秋の雨に凭る

風のほか何も音なき芒原

青空に絮次々と枯野原

神奈川 新海 英二

東京 大草由美子

東京 大森 道生

余言

安立公彦

紙粘打つや吉野の峽ふかく

西川 保子

「粘」について歳時記はこう記す。「木槌で布を和らげるために用いる木や石の台を言い、またそれを打つことをいう」。古来女性の夜なべの仕事として詩歌にも詠まれている。歳時記を見ても、夜なべと粘の頂目は並ぶ。

この句の粘は「紙粘」、紙を作るために楮こうぞの皮を槌で打つこと。楮の樹皮は和紙の原料として名高い。吉野は吉野紙の名のとおり和紙の産地である。作者はその和紙を打つ紙粘を直視する。「吉野」が一句の核として動かない。

大仏の背山あまねし秋日和

佐藤 信子

第四回神奈川大会は晩秋の鎌倉で催された。参加者七九名。盛会だった。顧みるに第一回神奈川大会が開かれたのは、平成二十四年九月、横浜の「港の見える公園」が吟行地だった。支部長の小島禾汀さんも元気だった。

大会当日は日曜日とあって、鎌倉は何所も大勢の観光客で賑わっていた。美男に在す長谷の大仏も高徳院の庭に露座し賜い、そのなだらかな豊かな座像は、遍く秋日に包まれていた。穏やかな安らぎの思いに充ちた一句である。

焼諸をこれはこれほと掌に受くる

鈴木 鳳来

「焼諸」の字を、歳時記によつては、焼薯、焼芋と書いてあるのを見るが、やはり「焼諸」の文字あつて、初めてほっこりとした温かみと味覚に結びつく。

作者はいまその焼諸を手渡される。ほのかに湯気の立つ大ぶりの焼諸だ。両の掌に持ち重りする焼諸は、かすかな香気さえ漂わせている。この句の善さは中七に「これはこれほと」にある。挨拶の言葉がそのまま詩こころを持った措辞となつて一句を豊かにする。但し多用は類句を招く。

秋ふかし本をめくると起こるかせ

鈴木 直充

机上に手製の本棚を置き、春燈誌を納めている。一年分のスペースは約65ミリ、幅60センチもあれば、七、八年分の春燈誌が並べられる。それだけ手にする頻度が高いということ。但しこれは読書には当たらない。

作者は読書家だ。一誌の編集長という立場は、幅広い知

識を要する。日常の業務の他に読書の必要性は、一般の読書の枠を大きく越えよう。今、一日の用務を終え、読書の刻を迎えている作者、そのひと時こそ、作者にとつては純粋な自我の時間と言えよう。中七下五の表現に、その愉しみの思いがひそやかに豊かに表現されている。

爽やかやどの路地行くも海ひらけ 岩永はるみ

「鎌倉」の前書がある。江ノ電沿線の地域は、まさにこの句の通り、幾つもある路地のどこを抜けても、秋の日を浴びた海がきらきらと光って見られる。相模湾だ。

この句、良くその風景をまとめている。固有名詞を使っていない表現が、前書によつて鮮明に沿線の景を集約している。観光地をどう詠むかという一例とも言えよう。

土産ばなし縁側で聞く柿日和 割田 容子

こういう句を見ていると、時が過去に遡る思いがして、人生の大方を過ぎて来た昭和という時代を改めて反芻する。この句、十月本部句会で、特選十句の一つに頂いた。ほのぼのとした句だ。「縁側で聞く」「土産ばなし」に昭和の世を思い出す。久しぶりに故郷に帰った作者の体験だろう。庭の柿はたわわに実をつけ、折からの秋日に色付きを見せている。「縁側」が効果的だ。懐かしさは決して後

る向きではない。根性を育てる大事な「一服」である。

こぼれ萩その白を愛で夫偲ふ 和田 絢子

今年の十一月十三日は和田孝村さんの三回忌だった。つい先日のことのように思っていたが早いものだ。孝村忌の前後に、乗鞍三彦、植田利一のお二人が逝かれ、続いて、松本俊介、小島木江、中野英伴の皆さんが逝かれた。何れも「春燈」にとつて掛替えのない幹部同人だった。

孝村さんは萩が好きだったのか。以前の句に、へ冬萩の括りほどいて日をとほすの句がある。細枝のみとなった萩の括り紐を解き、冬日を通すという庭木への慈しみの句だ。人柄が偲ばれる。掲出句、「その白を愛で」に、亡き孝村さんをしのぶ作者の思いが、よく表現されている。

会者定離流星はしく消ゆるかな 神田 恵琳

「悼・小淵三美江様」の前書がある。三美江さんは去る十月二十四日、入院先の病院で逝かれた。享年八十一歳。東武船橋百貨店にカルチャーセンターが出来、その俳句部門を担当することになったのは二十年前だった。三美江さんは第一期からの受講生。既に俳歴はあった。その句は写生を基本とした正統派というべきものだった。その作風は今年に入つて際立って良くなった。残念なことである。「流星はしく」、作者の思いも同じだったろう。